

## 映画探索

『汚れた心』<sup>けが</sup>CORAÇÕES SUJOS

安井廣之 クリニック院長

監督 ヴイセンテ・アモリン ブラジル 2011年

一九四五（昭和二〇）年八月、広島と長崎に原爆が投下され、日本は連合国に無条件降伏した。焦土と化し、占領された国土で、人々は打ちひしがれて、行き交う米軍のジープやサイドカー付きの大きなオートバイを眺めていた。

そんなとき、あるうことか、日本の戦勝祝賀会を開いて喜んでいる人たちがいた。ブラジルに渡った日系人たちである。彼らはサンパウロで「臣道連盟」という極右の国粹主義組織をつくり、九割の日本人移民の支持を得て、日本が負けたことを口にする日本人を襲撃して回った。負けを言う人たちは「汚れた心」の持ち主であり、「国賊」とされたのである。信じられないであろうが、これは事実である。

臣道連盟によるテロは、一九四六年から四七年にかけておこなわれ、二三人の死者と一四七人の負傷者を出した。

このことは、日系ブラジル人社会でタブーとして封印され、長い間表に出ることはなかった。

二〇〇〇年にいたり、サンパウロ州議会議員を経験したこともあるジャーナリスト、フェルナンド・モライスが、丹念な取材と膨大な資料をもとに、ノンフィクション「汚れた心―臣道連盟の物語」を出版し、ブラジル日系人社会の闇の部分を明らかにした。残念ながら、邦訳はない。

これをもとに、一九六六年生まれのブラジル人監督ヴィセンテ・アモリンがつくったのが、この映画である。

原作も映画も日本人に好意的で、温かいまなざしが感じられる。

### 映画のあらすじ

舞台は第二次世界大戦直後のブラジル。日独伊枢軸国側の日本は、英米仏等の連合国側についたブラジルと国交を断絶していた。ブラジルでは、敵国である日本からの情報はすべて遮断され、日系移民は母国の敗戦を知らなかった。

皇国臣民としての教育を受けて移民した人たちは、神国日本が負けるはずがないと固く信じていた。加えて、彼らの多くは主としてサンパウロ州奥地の開拓民であり、ポルトガル語ができないこともあって、世界情勢もブラジルの政治情勢も、そして自分たちの置かれている状況も知りようがなかった。

た。

一九四五年、日本は敗戦を迎える。日系移民で、ポルトガル語を解する少数の人たちや短波受信機を持っていた人たちはその事実を知り、受け入れる。しかしながら、大多数の日本人移民にとって敗戦はありえず、いかなる証拠を突き付けられても、日本が負けたとは認めなかった。

勝ったと信ずる人たち（勝ち組）は組織を作り、負けを認めた人たち（負け組）を「汚れた心」を持つ国賊と決めつけて、主要な人物を次々と殺害する。日系人の日系人に対する連続テロである。

「勝ち組」を指揮しているのは陸軍大佐渡辺登（奥田瑛二）である。彼は「負け組」の誰それを殺せと指示を出し、そうすることが正義だと信じる同調者たちが殺人を実行する。渡辺大佐は日本の勝利を偽装し、迎えの船が来るというデマを流して帰国を願う人たちから金を巻き上げ、また米国のグラフィア雑誌に載った日本敗戦の写真に、日本が勝利したかのような説明文を付けて配布する手はずを整える。映画では、渡辺大佐の後ろにさらに大きな存在が隠れていることが暗示される。

写真館のあるじ高橋（伊原剛志）は渡辺大佐の指示を受け、

「負け組」の林と佐々木を日本刀で切り殺す。これを機に高橋の妻みゆき（常盤貴子）は彼のもとを去る。その後彼は大佐の行動に疑問を抱くにいたり、その欺瞞を暴く。大佐は刺客を差し向けるが、高橋は逆にこれを倒す。その足で大佐の家に行った高橋は彼に自決を迫り、拒絶されて彼を切り殺し、自首する。

時が流れ、高橋の殺した佐々木の娘あけみが写真館を訪れる。あるじが老いた高橋と知ったあけみは、写真を撮らせずに、みゆきが再婚したと告げて去る。

### 移民の背景

日本のブラジル移民は一九〇八（明治四一）年に始まる。七八一人が笠戸丸で兵庫県の神戸港からサンパウロ州サントス港に向かったのが第一回目である。

ブラジルは奴隷制度を廃止して以来、コーヒー農園の労働力不足に悩み、世界各国から移民を募っていた。一方日本は日露戦争で勝利したものの賠償金を取れず、景気が低迷していた。特に農村の疲弊がはなはだしく、政府は農家の二男三男をハワイや南米に送り込んだ。日本からブラジルへの移民は一九七〇年代まで続き、総計一三万人にのぼったといわれ

ている。この映画の時代背景となった一九四六年から四七  
ころには、家族を合わせたブラジルの日系移民は約三〇万人  
にのぼった。

神戸市の元町駅東口から徒歩で一五分くらい坂道を登る  
と、国立移民収容所がある。現在は「海外移住と文化の交  
流センター」と名を変え、博物館になっている。二階には当  
時の移民たちが出航前に宿泊した部屋が復元されている。

なお、映画好きは読書好きと思われるので付け加えておく  
と、昭和一四（一九三九）年に石川達三が「蒼氓（そうぼう）」  
を発表した。第一回芥川賞受賞作である。これはブラジル移  
民を題材にした小説で、冒頭のかなりな部分がこの移民収容  
所での出来事に割かれている。復元された宿泊室を見ると、  
石川の描写が忠実であることがよく分かる。彼自身、二六歳  
のときに移民船でブラジルに渡航し、農園に滞在した経験を  
持つ。

また、当時を偲ぶ建築物がサンパウロ州から犬山市の明治  
村に移築されている。大正八年築との表示があるので、百年  
前の一九一九年に建てられたものであるが、なかなか凝った  
木造の家屋である。これを見ると、本職の大工が移民の中に  
いたことが分かる。

初期のブラジル移民は日本政府の人減らし政策によるも  
のであったが、日本が経済的に発展し、逆に人手不足の状況  
になると、日系人の日本への受け入れが始まった。

二〇〇七、八年ごろのピーク時には、日本におけるブラジ  
ル人総数は三十一万人余を数え、四日市市には四千人超、鈴鹿  
市には五千人超が居住していた。ところが、二〇〇八年後半  
のリーマンショック以後、失職した人たちが相次いで帰国し、  
その数は急激に減少した。その後また増加に転じ、昨年九月  
の統計によると、ブラジル人総数は二〇万人弱である。かつ  
ては中国系および韓国・朝鮮系を除くと、ブラジル人が最多  
の外国人であったが、現在はベトナム人、フィリピン人に次  
ぐ数になっている。なお、これまでは二世、三世が中心で永  
住ビザの取得もむずかしくなかったが、今では四世の時代と  
なって、政府は容易にビザを発給しない傾向にある。

### モライスの原著を求める

映画に衝撃を受けた私はアモリン監督や映画の背景をイ  
ンターネットで調べた。そして、映画がフェルナンド・モラ  
イス著の「CORACÕES SUJOS（コラソンイス・スージョス）」  
をもとにしていることを知った。そこで、豊橋市にあるブラ

ジル書籍専門店アップステージ社のホームページで在庫のあることを確かめ、早速取り寄せた。

表紙を飾るのは、日章旗で靴を拭いたブラジル人警察官を殺しにトウパンの警察署を襲った「七人の英雄たち」の写真である。全員の顔に殺気がみなぎっている。

ポルトガル語の原著は三四九ページのノンフィクションで、関係者八人とのインタヴューと一〇〇を超える記録文書および関連書籍をもとに書かれたものであった。恐るべき執念があつて初めてできる労作である。二〇〇〇年の初版以来、既に三版一一刷を数えている。

これを、私は二か月かかって仕事の合間に読んだ。

映画版には、映画の常として、興味を引くストーリーをもとに、観る人を飽きさせないアクションの連続がある。それを二時間前後の枠内に収めるのであるから、自ずと内容は分かりやすくなり、訴えるところは単純化される。内容が多岐にわたるあまり主張が散漫になることは許されない。その故にか、アモリンは中心人物を一人に絞り、その主人公のいわば「なれの果て」までを描くことで、日系移民社会の中での主人公のアイデンティティーと疎外感を浮き彫りにしている。だが、ブラジル社会における日系移民総体のアイデンテ

ィティーと疎外感は、主人公が街を歩くときに向けられるブラジル人の目つきからしかうかがえない。差別は表面化していない。

一方、モライスの原作はというと、当時の日系移民の置かれた状況とそれに対するブラジル人と日系人の反応を緻密かつ丹念に描いている。

### 原著を読む

原著を通読し、要点を拾ってみよう。日系移民が第二次世界大戦中から戦後にかけて置かれていた状況と、その中で彼らの動きが活写されている。

### \*言動の制約と強制移住

大戦に伴い、ブラジルは日本との国交を断絶し、日本は敵国とみなされることになった。日系移民は公共の場や街頭での日本語使用を禁止され、国旗の掲揚、国歌の斉唱、天皇の肖像の掲示、許可証のない旅行等も禁止された。あわせて日本語の新聞雑誌の発行も禁止された。情報源としてポルトガル語の新聞・ラジオはあつたが、それらを理解できる日系移民はほとんどいなかった。また、夜間、子供たち向けに寺子

屋式の日本語塾がひそかに開かれていたが、これも警察に踏み込まれて閉鎖され、教科書は焼かれた。

ブラジルが連合国側についたため、大西洋ではドイツの潜水艦が多くのブラジル商船を撃沈していた。ブラジル政府は、沿岸部に住む日独の住民が潜水艦に無線で船舶の位置情報を流していると疑い、両国系の住民を内陸部に強制移住させた。この措置のために、全財産を二束三文で売り払い、それまでに築いた全てを失う人たちが続出した。

#### \*薄荷工場と養蚕農家の焼き討ち

薄荷を火薬に混ぜるとその威力が数倍以上になる、毒ガスに混ぜれば体への浸透力が増してガスマスクが無効になる、高速回転のエンジンに塗れば冷却に有効である、等の薄荷に関するデマが流れ、これがアメリカに輸出されているので日本には不利だ。

ブラジル産の絹がパラシュートの材料になっており、アメリカに輸出されて敵の攻撃能力を高めている。これも日本には不利だ。

これらの理由で、日系移民は日系の薄荷農家や工場、養蚕農家や製糸工場を焼き討ちし破壊した。

#### \*臣道連盟

終戦間際になると、臣道連盟という国粹主義団体が結成され、陸軍大佐キカワ・ジュンジ(漢字不詳)が中心となって、「勝ち組」を主導する。資金源は日系移民の九割を占める勝ち組の人たちである。映画の渡辺大佐はこのキカワ大佐をイメージした人物像である。連盟は「特行隊」を組織し、「負け組」の主立った人たちを「汚れた心」の持ち主として次々に粛清する。

映画の冒頭、日章旗で靴を拭いた警官を青年たちが殺しに行く場面があるが、これは実話である。七人の青年たちが釈放されると、日系社会は彼らを英雄として迎える。そのうちの一人サカネ・エイイチ(漢字不詳)は狂信的な臣道連盟のメンバーで、「特行隊」を率いて次々と殺人を犯すが、自身は行方をくらまして捕まらなかった。

#### \*キカワ大佐の狂信と偽の詔勅

日本の無条件降伏を知らされたキカワ大佐はこれを信じず、終戦の詔勅の中には「降伏」と「無条件」の文字はないと突っぱねる。確かにこれらの文言は、詔勅の中にない。

臣道連盟は、「昭和二十年八月十七日」づけで「陸海軍二賜ハリシ勅諭」を偽造する。「民族恒久ノ為戦争ヲ継続シ陸

海軍八国難ニ際シ戦争ノ目的ヲ貫徹セヨ 御名御璽」という内容である。

### \*戦勝祝賀会

日本は敗戦を迎えるが、勝ち組が九割を占める日系人社会では、日本勝利のニュースを盛り込んだパンフレット類が出回り、ミズーリ号上の重光外相の調印の写真も日本に有利なように変えられていた。日系社会では日本の敗戦を信じる者はほとんどおらず、それを口にすることもはばかられた。サンパウロ市の日本人街周辺の宿泊施設は、戦勝祝賀会に集まった日系人たちで一杯であった。一九四五年一〇月六日の新聞は大見出しで次のように報じている、「ヒロヒトの軍隊の偽の勝利を祝うため日本人数百名がサンパウロに到着」。

### \*臣道連盟のアングラ放送

連盟は地下放送局を持ち、日本人向けに、ありえない内容の情報を流した。例を挙げると、

「トルーマン米国大統領は職を捨て、三〇人の官僚とともにカナダに逃亡した」

「日本は米国大統領に、リンデンバーグ大佐を任命した」

「チャーチル英首相が逃亡した。将軍がイタリアまで連れ戻しに行った」

「マッカーサーが自殺した」

「九月一日にソ連の武装解除が開始される」

「日本敗戦のデマはリオデジャネイロのユダヤ人が源である。リオの住民は日本の勝利を知っているので、ユダヤ人はサンパウロに向かって逃亡中である」

「マニラと沖縄で敵艦隊一五隻を捕獲した。ウラルの前線でソビエト軍一五〇万が投降した。連合軍の全兵力は一〇年間日本の支配下に置かれる」

等々、荒唐無稽な話には切りがない。

### \*ブラジル人の日系人襲撃

オズヴァルド・クルーズは人口一万二千の小さな街で、住民の半分弱が日系人であった。そこに住む二人が負け組で、サカネを指揮官とする特行隊がこの二人を襲撃する。

それまでの臣道連盟のテロに業を煮やしていたブラジル人住民が、これを機に怒りを爆発させ、「リンチだ、リンチだ！」と叫びながら、老若男女の見さかいかなく街中の日系人を襲撃し、袋叩きにした。しかしながら、ブラジル人たちには自制心があり、一人の死者も出さなかった。日ごろの鬱憤を晴らすことが目的であったようである。

なお、同様の騒ぎはトウパンでも起こっており、ここでは

ブラジル人住民が政府に対し、日本人を強制収容所に入れるように要求している。これは実現しなかった。

**\*憲法に、日本人移民を認めないという条項を入れるか否か、で議論**

ブラジルに同化しないでテロ行為を繰り返す日本人の移民禁止を憲法に盛り込むか否かについて、一九四六年八月に憲法制定会議が開かれ、賛否同数となったが、議長の反対で否決された。

多数の議員が日本人は異質で有害だと認めたものの、憲法にそのような条項を入れることは不適切というのが、否決の理由であった。

### **\*臣道連盟の知事選への影響力**

一九四六年当時サンパウロ州には一八歳の日系人子弟が一万五千人いたというから、選挙にあたっては侮れない勢力であったようである。

知事候補アデマールは三八一人の臣道連盟員の収容されているアンシエータ島の刑務所を訪れ、早期釈放を約束するなどの選挙運動をおこなった。これは連盟の勢力がなお強大であったことを物語るエピソードであろう。アデマールは、その後知事に当選した。

### **\*サカネ・エイイチのその後**

特行隊サカネ・エイイチは警察の手を逃れて「浪人」となり、六〇年代中ごろにコガ・マサオと名を変えて写真機器商をしていたと言われている。

モライスの原著から、筆者の興味を引いた部分だけ若干書き出してみたが、ご覧のようにストーリー性は無い。実際の彼の筆致には、登場人物を直接見つめながら描写しているような臨場感がある。それだけ下調べが綿密だったということであろう。

本書の巻末に著者の履歴が記されていて、そこには著作が列挙してある。その中に「Loga」という作品を見つけた。一〇年余り前、私はこれと同名のブラジル映画を四日市市の泊山崎町にあったブラジル人経営の貸DVD店で借りて観た覚えがある。ナチに迫害された女性がブラジルに逃げ、結局官憲に殺される内容だったと記憶している。時間があれば、この本も取り寄せて読んでみたいと思っている。映画好きは読書好きなのである。